

報告の要旨と問題点

報告者の報告は別記の如くで、井上会員からは、青森県倉石村北向、千葉県多古町方田、広島県庄原市上谷の三地域における農家老人生活実態調査結果の資料にもとづき、現段階における農家経営の危機的状況のもとに露呈されてきた農家生活の問題点を、農家就業

構造の老令化と農家老令者の生活問題に焦点をあてながら、詳細な報告が行われた。

井上会員の報告については現段階の農家経営の危機的様相が「老人生問題」を素材としつつ強くうきぱりにされたが、討論においては、このような事態を資本主義的諸関係の展開にともなう「貧困化」と理解するとすれば、かかる「貧困化」把握の視点はどのように理解されるべきか、いわゆる「核家族化」と貧困化との関連、あるいは子供や孫たちのために植林するといった老人の意識のうちに、「いえ」の存在を看取すべきか否か、今日の農民家族生活理解の一契機として相続問題、相続形態をどう考えるべきか、等々多様にわたり、共通課題の問題点を考えるのに貴重な示唆を与えるものであった。

河村会員の報告は「戦中期における家イデオロギーをめぐる問題」についての報告で、「歴史学研究」七一年十月特集号掲載の森論文に闡説されつつ、天皇制ファシズムの社会的基盤としての、戦中期農村の把握という視点と関連させながら、この時点における農民の「いえ」を、小商品生産者としてとらえることの意義を問題とされたものであった。

報告については、この時期の農民層を「小商品生産者」としての「小経営」層として把握する場合の、積極的な規定条件をめぐって、たとえばエンゲルスの「小農規定」との関連、「小経営」における「土地所有」の意義、当時の「小商品生産」の展開度の評価、などがいえ、「理解と関連して論議され、ファシズムの把握についても種々の

問題がとりあげられた。議論の詳細に立ち入ることはできないが、小作争議の激発とともになう村落支配秩序の変容、またいわゆる小作前進的農民層分化の展開、などを念頭におきながら、この時期の農民の「いえ」のありかたを、明治期や、戦後期と対比させつつ、検討することの必要性が大きく問題として提出されたといえるように思われ、大会共通課題の具体化に示唆するところすくなくなかつたと思われる。

(安原茂)